
ゑうゝ あをん！

八月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

えう、あをん！

【Nコード】

N87320

【作者名】

八月

【あらすじ】

西暦二〇一五年。第三新東京市に住む碓シンジは、新しいことを始めようとするも何も思いつかず、ダラダラと日々を過ごしていた。そんな時、旅行に出かけていた父親から父が働いているネルフに來いと呼ばれる。やって來たシンジが見たものはエヴァンゲリオンという人類の切り札だった。

少年、少女たちと人類の敵・使徒との戦いが始まる！

———わけではなく、のんびりとした日常が始まる。

「エヴァンゲリオン」に「けいおん！」の要素を加えたお話です。

第巻話 エヴァンゲリオン！（前書き）

はじめまして、八月と申します。はつぎ

初めての投稿になりますが、どうかよろしく願います。

また注意事項ですが、この物語には、けいおんのキャラは登場しないのでその点はご了承ください。

シリアス感ゼロのほのぼのストーリーをお送りしたいと思います。

第壱話 エヴァンゲリオン！

第壱話 エヴァンゲリオン！

僕には将来になりたいものなんて何もない。夢とか考えたことがない。

そんな僕が担任の先生に進路相談で将来のことを聞かれて何と答えようかと考えて、ふと少し前にテレビで見たことを思い出して軽音をやりたいたと言ったら「どんな楽器がやりたい？」と聞かれた。

僕はカスタネットと答えたら「カスタネットは違うだろ、常識（ry）」と言われてしまった。

アレ？ 違ったっけ？ でもカスタネットは母さんに教わって得意なんだけどなあ。

こんな感じに———ウンタン、ウンタン、ウンタン、ウンタン、ウンタン、ウンタン、ウンタン、ウンタン、ウンタン（ry

ジリリリリリリリリリリリ！！

「う、うゝ」

———うるさいな。人が寝ているというのにもう……。

「お兄ちゃん、時計鳴ってるよ」

「————え！？」

さっきからうるさく鳴っているものが時計だと妹の言葉でようやく気が付いて時計のベルを止めようと手を動かした。

すると誤って時計を落としてそうになってしまった！ あわあわと

慌てながらようやくキャッチした時計の針を確認すると———なんと八時！

「ひゃあ！　ちこく、ちこく！」

寝ぼけ気味だった僕の頭は一気に目が覚めて急いで着替えを始める。

「何をそんなに急いでいるの？」

レイが何か言ってるけどそれどころじゃない僕は太急ぎで着替えを終えて玄関へ猛ダッシュ！

二階からリビングに降りる途中で尻を打って痛いけど急がないと！

「レイ、行ってくるね！」

「え！？　お兄ちゃん！　……………折角の味噌汁」

第三新東京市で両親と妹のレイと暮らしていましたが、両親は海外に出かけていて今は僕とレイだけで生活しています。レイは炊事掃除洗濯ができる僕の自慢の妹です。特にレイの作るお味噌汁は格別なんだ。

そして今日、僕は父さんに呼ばれて『ねるふ』に行く事となったのだ。

あれ？　でも父さんって旅行に出かけてたんじゃあ……………まあいいか。

「ロボット？」

「厳密に言えばロボットではないわ。人が造り出した人型汎用決戦兵器人造人間エヴァンゲリオン。その初号機よ。建造は極秘に行ってたわ」

ねるふに到着すると父さんの部下の葛城ミサトさんという綺麗な人にねるふを案内してもらった。その途中でまたもやミサトさん（名前で呼んでと言われた）と同じくらいに綺麗な赤木リツコさん

ていう白衣の人と合流してあるところに連れていかれた。そして僕は、ロボットの目の前でリツコさん（名前で呼んでと言われた）から説明を受けているのだ。

それで僕の目の前にあるこのロボットの名前が……………。

「え、えつとう、エヴァーン……」

「エヴァンゲリオンだ、シンジ」

僕がそのロボットの名前を言おうとすると上から僕の名前を呼ぶ声が。この声は……。

「あっ！ 父さん！ 久しぶりだね」

「ああ、久しぶりだなシンジ」

僕の名前を呼んだのは僕の父さんの碇ゲンドウだった。父さんは見た目はヤクザに見えるって言われているけどそうは見えないけどなあ、だってとっても可愛い人なんだよ。

「あれ？ 見ない間に何だか——透けたね」

エヴァーの頭よりも高い場所にいる父さんは何だか透けていた。

……………年なのかな？

「……シンジ君、あれは立体ホログラムよ」

なんですと！？ そんな技術があるなんて流石は二一世紀だね。すごいや。

「シンジ、お前にはこの初号機のパイロットとなるのだ」

「ええ！？ 何で僕なの？」

「他の人間には無理だからな」

「でもこんなの動かすなんて無理だよ」

「座っているだけいい」

「すごいそれでいいんだ！ でもホントに僕にできるのかなあ」

「ふ、問題無い」

自信満々に父さんは言うけど見たことも聞いた事も無いエヴァンに乗れるわけないと僕は思った。

そんな弱気な僕を父さんは。

「何故ならシンジ、お前はやればできる子だ。お前なら必ずできる

と私はそう信じている」

そう熱く僕に語ってくれた。そんな……そんな風に言われたら僕、ちよつと本気にしちゃうよ。

「分かったよ父さん、僕、乗るよ！」

「ええ！　それで乗っちゃうの！」

驚くミサトさん。それで乗っちゃうのって失礼だよ。僕は父さんの熱く大きな期待に応えたいだけだよ。ここで素直にはい、と言えばもしかしたらお小遣いが貰えるかもなんて思っていないよ。うん。

「流石はユイさんの息子……」

確かに僕は母親似だけど今の会話で何でリツコさんはそう思ったんだろう？

「そういえば父さん。何でここには居ないの？　それに母さんは？」

「忘れたのか？　今は父さんと母さんの結婚一五周年記念で南極へと旅行に居るからだ」

「おー、そうだった」

そう言えばそうだったよ。

「では、葛城二佐、赤木博士、後は頼む」

「りよ、了解です」

「父さん、母さんによろしくね。あとお土産も」

「ふっ、問題無い」

父さんはそう言ってホログラムは消えちゃった。

こうして僕はエヴァンゲリオン初号機のパイロットとなって人類の敵らしい使徒って化物と戦うことになりました。

数日後にその使徒が現れて、初めての出撃で初めての戦闘で緊張していて足を一歩前に出しただけで何も無い地面でうっかり転んじやった。テヘッ。

その隙に使徒にボコボコにやられちゃってそうしたら気を失ったけど僕が目を覚ました時には使徒に勝っちゃいました。

！
ホントに座っているだけで勝てちゃうなんて、
すごいやエーヴァ

第壱話 エヴァンゲリオン！（後書き）

あとがき！

昔、メモ帳に書いていた話を見つけてそれを投稿してみました。

どうしてこんな話を考えたのだろうか、と昔の自分に聞いてみたい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8732o/>

ゑうゝ あをん！

2010年11月12日21時40分発行